

山崎郷土叢報

No. 50
 52.11.30
 兵庫県六粟郡
 山崎町教育委員会内
 山崎郷土研究会
 電話②2000

近代初頭の山崎藩(十一)

島田 清

二、池田輝澄時代 (続十)

寵臣を殺して逐電した自分の家臣をかくまい、さらに、謀計をもってその実父まで引き摺った旗本三人衆と、東照神君の外孫という毛並一級品の岡山藩主松平(池田)忠雄との不穏な対立は、江戸初期の武家社会を象徴する重要事件であった。しかし、その後、荒木又右衛門の助太刀によって、張本人の又五郎が討取られ、解決の第一歩は踏み出された。第二段の実父引渡しは、その後、さらに渋滞し、一時は、有耶無耶に葬り去られるかに見えしたが、忠雄の嗣子光仲の後見役である山崎藩主松平(池田)輝澄の奔走によって、漸く事件全体の解決に漕ぎつけた。これは、市井の大衆も評判したごとく、全く、輝

目次

近世初頭の山崎藩……………島田 清……………	一
荒井堰の歴史と伝説……………千本 治……………	五
明治代の子供の遊び兵隊ごっこ……………福井 託二……………	八
昭和五十二年指定の史跡に就いて……………	一〇
明治以来百年の年譜……………堀口 春夫……………	一三
役員会情報……………	一五

澄の、功績といつてさしつかえない。

このあと、輝澄は、引取った河合又右衛門を、追放することとした。輝澄の考えでは、これによって、将来の禍根を絶てる、と思つたのであろう。しかし、「この処置は手ぬるい」と、永久に葬り去ることを進言し、実行に移したのが蜂須賀家政、すなわち、「蓬庵老」である。蓬庵は、幼少な藩主松平(池田)光仲の生母蜂須賀氏の祖父。そして、家政の嗣子至鎮は、元和六年(一六二〇)、三五でなくなり、後嗣忠英はまだ一〇才であった。家政は、このため、幕府からその後見を命ぜられ、蜂須賀家、ならびにその領国、阿波・淡路の政治をとり仕切っていたのであった。そこへ、孫女の生んだ松平光仲が、

また、幼少の身で三十二万石を継いだのであるから、蓬庵は、これに対する配慮をしなければならなかった。河合又五郎とその実父又右衛門によって惹き起こされた事件をつぶさにながめていた蓬庵が、取り扱いに対して普通以上慎重さと徹底度を必要と考えたのは、やはり、〃さすが〃といわねばならない。〃焔眼〃と称してもよい。輝澄と蓬庵との間に、同じ又右衛門の取扱をめぐって、このような開きができたのはなぜだろうか。それぞれの性格・知能・経験などがそうさせたことにはちがいないが、育った時勢と環境も大きく影響しているのではあるまいか。

東照神君の外孫として、大名の御曹子に生れ、家康の天下支配がほぼ確定した時期に成長して山崎藩主になったものと、権謀術策、興亡浮沈のあわたしい安土・桃山時代を切り抜けて阿波・淡路の大守に成り上った人、との相違がそうさせた、ということもできるのではあるまいか。このごろの時代相、時勢の基本を知る上からいって、このことは大事であると思うので、次に、蜂須賀蓬庵の経歴と人物について述べておこう。

蜂須賀家は尾張の名族である。尾張国衙領の蜂須賀郷に先祖が住んだことからそれを氏としたもので、小六正勝の代に美濃の斎藤道三に仕え、道三の死後は尾張へ帰

食料品一切卸問屋

③ 寺田商店

山崎町紺屋町 電②〇〇〇五

って岩倉城の織田信賢、犬山城の織田信清に仕えた。しかし、その後、再び尾張に帰り、蜂須賀郷に在住していたとき、木下秀吉が織田信長の部将として美濃国墨股城を預かり、来住したので家来となった。

正勝は、人となり勇武で、しかも、人事・外交などの政治的手腕があった。一般的にいって、武功は誰の目にもつきやすく、文勲は頭われにくい。秀吉麾下についても、加藤清正や福島正則はすぐに思い浮かべられるけれども、黒田孝隆・浅野長政・蜂須賀正勝などはそれほどないのが、いい証拠だ。正勝が、秀吉の放浪時代、野武士の棟領となって、三河国の矢矧橋上で初めて秀吉（日吉丸）に出逢ったという話は、もちろん、事実でない。江戸時代に入って、興味本位の物語が流行するようになってから「太閤記」の著者がつくりあげたものである。

正勝の嫡子家政は、父の素質をうけて剛勇であり、同時に思慮周密であった。天正一三年（一五八五）六月、四国征伐が起った。このとき、正勝・家政は居城の竜野を出、山崎城主黒田孝隆とともに備前に入って宇喜多秀家の軍と合し、総勢一萬五千、児島より屋島に渡って讃岐の諸城を攻めた。秀吉の主力、大和・紀伊・和泉の兵三萬は、秀吉の弟秀長に率いられ、同年六月一六日、堺より淡路の洲本に渡り、さらに、福良から鳴門海峡を越えて阿波の諸城を攻めた。土佐の長曾我部元親は部将を阿・讃・予の三洲に派遣し、諸城を固めさせていたが、主力は、もちろん阿波にいた。蜂須賀正勝・家政はこれを察知し、讃岐諸城の攻略をそこそこにして阿波に入り、秀長軍に合流して諸城をつぎつき攻略した。このため、元親は二ヶ月後に降伏した。

戦後、秀吉は、蜂須賀父子の功績を第一とし、阿波一國を与えた。これは、家政が、讃岐侵入にさきだつて阿

山崎中央商店街

堀口写真館

結婚式場 補風閣 出張
農協会館

波の地理にくわしい人を探し、森村春という武士を得て嚮道役にし、卓抜した効果を挙げたからで、この辺に、蜂須賀父子の面目はよくあらわれている。

正勝は、翌天正一四年五月二二日、大阪城下の居邸で卒した。六一才であった。あとを継いだ家政は、徳島城を治め、阿波統治の拠点にするとともに、民政を励み、播磨の藍を移して特産阿波藍を興したり。赤穂の技術者を招いたり製塩業を開発するなど、特筆すべき成績をあげた。新米の領主に対して、領民が悦服したのはこうしたことのためである。

やがて、天正一五年、九州の島津征伐が起った。家政は出陣し、高鍋城攻めで功績をあらわし、また、同一八年の小田原城攻めでは萩山城攻めで功を立てた。ついで、文禄元年（一五九二）朝鮮征伐がおこると、唐島・晋州城・南原城・宣州城攻めに奮戦した。家政の着実で手堅い活躍は、秀吉麾下の諸将間でも重んぜられ、宿将としての地位を着々と築いていった。

しかし、秀吉の晩年、石田三成等の文治派が抬頭してくると、家政の身辺にもいろいろの問題が起こった。その最初が、第二次朝鮮出兵時の事件である。

慶長二年（一五九七）一二月二二日、明軍は大挙して南鮮の蔚山城に押し寄せた。守将の加藤清正・浅野幸長は急を司令官の小早川秀秋に告げ、救援を依頼した。こ

のため、秀秋は、自ら兵を率い、毛利秀元・蜂須賀家政等とともに進んで明軍を討ち、翌三年正月二日の総攻撃で完全に撃破した。しかし、この戦に対する秀吉の意中は決してかんばしくなく、「悉、不討果一段、残多、被思召候事」との不興を蒙った。追撃戦において、明軍を充分に捕捉し、殲滅できなかった不首尾をなじったものであろうか、やや、苛酷な取扱いといってもさしつかえない。この辺が、奉行人、石田三成の讒言と見られるところで、家政は責任者として帰国、謹身を命ぜられた。

秀吉は、この年の春、山城の醍醐で盛大な花見をもよおした。有名な「醍醐の桜狩」である。しかし、この直後から病み、八月一八日、遂に六三才を一期として、伏見城中に薨じた。家政は、この直前にゆるされ、大阪へ出た。しかし、秀吉の臨終には間に合わなかった。秀吉の死後、子嗣いの武将が多く家康に望みを囁し、秀吉の遺児秀頼を擁しようとする石田三成一派から離れて行った中に、家政も加わっていたのは、こうしたことが原因となっていたのであろう。

文禄四年（一五九五）八月三日、秀吉は、「御掟」をつくり、諸將に遵守する旨の誓書を書かせた。その中に、「諸大名縁辺之儀、得御意、以其上、可申定事」の一条がある。これは、大名同士の私婚によって党派が

和洋酒食料品販売

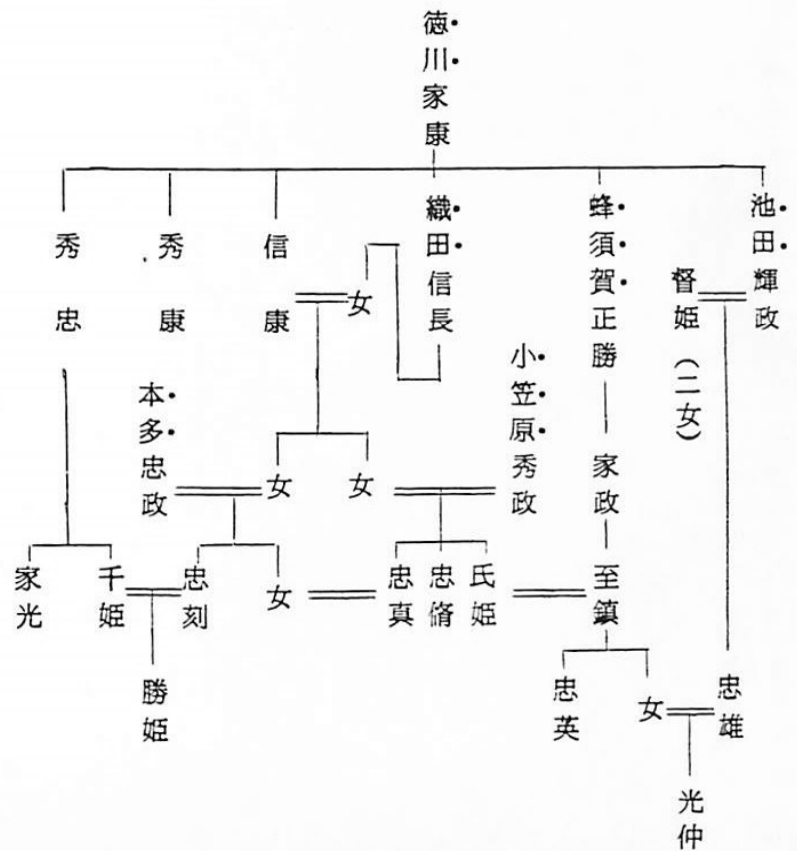
八百福商店

山崎町山田 TEL②〇四二三

できることを防ぐため、慶長三年、秀吉が薨じてからは、特に嚴重に監視された。しかし、徳川家康は、秀吉の薨後、五ヶ月目の四年正月、ほしいままでに一族の男女を大大名と婚約し、「掟書」を顧慮せぬ態度を明らかにした。徳川氏の系累である小笠原秀政の女、氏姫を家康の養女として家政の嫡子、蜂須賀至鎮と婚約し、翌五年正月、大阪玉造の蜂須賀邸に興入れさせたなど、顕著な一例である。わかりやすいように、関係系図を掲げておこう。

荒井堰の歴史と伝説

千本廉治



大和民族の農耕は、水稻栽培によって始められ、水利の便を求めて開拓が進められた。種々の自然現象は、開拓の度に障害があり、常に幾多の苦勞が続きました。早魃と洪水は農民にとって、常に水との闘いであった。早粟郡内で早く拓け、最も大きな平野と云われた城下

平野も、典型的な早魃に苦しんできました。その証拠には、この地域の中心地に式内郷社雨祈神社が、祭祀されていることによつて、わかると思ひます。早魃が続き、水が涸れ上がり、稲が枯死寸前の状態になると、この神社の神事に氏子の者達が手に手に松明を灯し、深夜神社の庭に集り、「たんもれたんもれ すいじんのうゑ田守れ水神王」と、歌い祈りを捧げ、神官は、常暗の社で御神体（さらばさら）を清水で洗い浄め、雨の恵を祈願して靈驗を待ち望んだのであります。此の御神事も昭和二年七月の大早魃の時に成りなわけてから絶えて、忘れ去られようとしています。

農地の開拓が水利の便を求めて行なわれ、水を引き入れる為に井堰を造り、水路を掘るなどの農業土木の工事に工夫が施こされました。城下平野の井堰が、揖保川水系中、竜野市小宅にある揖保井堰に次ぐ、大井堰と云われる荒井堰であります。山崎地区三部落、城下地区十二

新才会ピアノ教室

山崎町庄能一九ノ一一
電話 ②三三六八六

部落、受益農家五〇〇戸、水田面積二七五町歩（昭和二十一年度）の用水堰であります。

昔は比地が~~山~~を廻って、新宮町平見香山あたりまで、延々四キロ以上に及んでいたと云われます。

この荒井堰が、何時の時代に造られたのか、何の記録も無いので判明し難いが、その所在地が庄能字荒井となつてゐることから、字名荒井が生まれる以前から、荒井堰が存在していたと考へてもいいのではないかと思われ

ます。又荒井堰の名称の起りは、その場所が、掛保川の落差が大きいため急流であり、十二波の上部にあつて、岩箸の露出の多い所で、しかも伊沢川の合流点であり、非常に荒々しい所でもあり、井堰を造るには困難な場所であつたので、荒井の名が生まれたのではないかと思われ

ます。旧幕時代には、城下は山崎藩にとつて大切な穀倉地帯であり、山崎城の内外の堀の水を上溝と言つて、荒井堰の水路から取入れられ、上溝そのものも外堀りの役目を持っていたので、藩としてもこの井堰を重要視してゐたのであります。

毎年堰立工事を、初める前には、槍術指南が石船の舳に立つて、槍を水中に入れ、荒井の主である白鯨を鎮めて、無事に工事が進められるようにしたと伝えられてい

和洋酒・食料品

城内商店

山崎町東鹿沢 電②〇三六九

ます。この主の住んでいた附近は水深五メートル程もあり、ここにある巨岩は鯨岩と呼ばれ、今も頭部を水面に現わしています。昔は近所の子供達の水泳場であり、この岩が飛び込み台となつていたのであります。

荒井堰は井溝の取入口のある庄能字荒井から、対岸六ヶ所部落の塩瀬まで、長さ約二五〇メートル、掛保川を斜横に堰止めて、水を湛えて井堰に流し込むように構造されたのであります。その為に、ひじりと呼ばれていた松丸太を三角形に組んだ枠を作り、水深・床磐に合わせ、大小様々の物を作る。大きい物では前脚四メートル、後脚六メートルに及ぶもの六十五程を水流の中に沈め、これに沢山の石を載せて積みあげ流れないようにした上で、柴とか蓆を当て水を堰止める工事をしたのであります。この工事が始まるのは大抵五月の初めで、（その時期は奥地から流される筏が止まる）。この時をねらい田植の



始じまるまでの間に終るように計画されるが、名にし負う荒井の急流の中での作業で困難をきわめました。又この工事の為に特別に造られた石船といわれる長さ五間・巾二間・高瀬船を大きく丈夫にした川船を使ったので、水に強い船を操ることの出来る熟練した元気な若者でなければ、出来なかつたのであります。主として船元・山田・庄塚から選らばれた人々によってなされたようです。こうした人々によって荒骨が組立てられると、次は各部落の耕作反別によって定められた人足が順番に出役し、土砂を盛り水洩れを防ぐ作業をしたのであります。これを本役といい、一廻り六十人、二〜三回繰返す事によつ

て大方の工程が終るのであります。想像に絶するような作業であり、多大の労力の投入であったのであります。折角造り上げた堰も洪水の為に流されることがあり、ひどい年には夏中に三回も堰直しをすることがあります。

しかも早魃に出合う

と、掛保川の水が枯渇して、水が上からなくなり田植が出来ない様な状態になると、土入れとなるのであります。土入れと云うのはこの水の恩恵を受けている総ての人々、農家も非農家の別無く一日天役（無報酬）で出て行き六百人ばかりの人達によって、三津部落にある官弦寺山より延々一キロ半の間、人の列をつくり、山土を運んで必死の努力をし、何とか渇水を喰い止めようとしたのであります。荒井の土入れをみると、主の白鯰が怒って雨を降らすと言われて、近隣の農家からも期待を持たれたのであります。

昭和二十七年県営引原ダムが造成され、農業用水の調整が図られるようになり、そのお陰で、洪水渇水ともに緩和されるようになったのであります。

しかしながら、昭和四十五年八月西播中心に見舞われた一〇号台風による決定的な被害によって、決壊流失して取水の使用不能となった。関係農家の強い要望と、町当局の努力、県当局の理解によって、県営工事に取り上げられ、昭和四十七年着工、同四十八年三月完成、工事費一億四千万円を投じて最も近代的な、頭首工が生まれ、水不足の心配等が過去の悪夢のようになったのであります。

忘却の彼方におしやられようとする先輩達の幾多の困苦と痛恨を永久に胸にとどめるために、この拙文を草す

る次第であります。

明治代の子供の遊び

兵隊ごっこ

福井 託 二

これは過ぎ去った古き良き時代の子供達が、遊んだ明治のある年の晩秋田町の子供の想い出話である。明治の終り頃から大正の初めにかけては、まだ日露戦勝の陶醉の夢まだ醒めやらぬ時分で、遊びごとくも軍国調が多く盛んであったのも田町(山田村)は例外ではない。当時田町に高小二年の最上級で虎やんと云った男の子が居て、ワンマン大将を決めこみ子供ながら中々しつかり者であった。放課後いつも二・三人の下級生を連れ歩き、何かの遊びにも下級生達は唯々諾々となっていた。晩秋のある日虎やん何の興味が湧いたのか、田町の子供を全部集めまだ人員が足らず、隣り中広瀬村から虎やん自分で出かけて子供達の遊んでるのを七・八人も応援を連れて来た。この人数で得心がしたのか、直ぐこれから戦争ごっこをするから、昨日家の女達に頼んだメリケン弾丸を、一人に十ヶ宛今から持って来いと命令した。女達に頼んであったメリケン弾の使い道が全員始めて納得できた。メリケン弾をてんでに十ヶ宛、内懐にして稲荷さん前に集合した。開戦と同時にこの弾だけが便り、これ一発ど

和洋酒
食料品卸問屋

三輪又商店

TEL② 二一七三

こかに当れば戦死で負傷も看護もない、よく気をつけて弾を大切にしておいて、無駄には使わないと虎やん大将の云い渡しである。戦場範囲は中広瀬の稲垣さんから南へうるし畑まで、それを西へ土小屋まで、そこを北へ川伝に永観橋までである。区域は一寸広大だが段々兵隊の戦死者が増えて名譽の生残り兵同志の決戦は、今稲を刈り取った宮田でやると、虎やん大将の顔を引き吊らせての説明である。田の稲はもう殆んど刈り終って視界はいつもより広々としている。毎年の姫路聯隊の秋季大演習がある筈だが日取りはまだ未定である。田町の兵隊達はこのあたり何処そこに水溜りや、蓋なし井戸、どのあたりに牛馬の糞の落し場所まで、一切を知りつくしてしらみつぶしに百も承知である。全兵員借者まで入れて三十五・六名、人数を紅白二軍に分けそれぞれ紅白の細布れを帯前に差し挟んで、小隊長から訓示めいた説明を聞いている。急に五年生の伊太やんの吹く大きな玩具のラッパが鳴り渡

ると、それ開戦だと全員行動が慌しい。とっさに上手の納屋に隠れるもの、下手の小屋にとびこむもの、土堤の蔭に伏せるもの、稲垣の森に駆け込むもの、思い思いに散開して行った。しばしの静寂も束の間と思う内、近くの家裏側で二・三の喊声が上がったと見ると、塀の外へ胸に白い弾あとつけた紅軍が逃げ走った後を、白軍の二人が続いて後を追って行く、これを合図に彼処此処で、ワアワアと接戦は始まり、それ戦死だへたばれ動くなど、必死のやりとりが盛んである小屋から、一人腰の弾あとをバタバタ払いながら、あゝもう戦死したが早いこっちゃと、自分の弾を友軍に投げ与えている。向この芋畑のつるの上に、座って紅白二人がこの弾あと見て「見いまだ尻に着いているだろ。これが戦死かい軽い怪我じゃわい。この戦争に怪我はないぞへたばれと、そこへ戦況視察の虎やん大将が見付け調べていたが「こりやはつきり戦死じゃしようがない」と云いすて宮田の方へ走



書道用品
結納用品

志水成文堂

山崎町さつき通り一丁目
電話 ②〇五四七・四三〇五

って行く。北方の永観橋付近で逃げ惑う白軍の一兵を二人の紅軍が鉄打ちに追いまわす内、白兵は青蓮寺川土堤から足進らせざんぶり落ち込んだ。二人の紅兵は弾打つことも忘れ両手差しのべ引き上げている。稲垣森のうす暗い樹林の樁の木上に隠れていた紅軍一人が、下を通る白軍二人に残念にも見つけられ、何か大声に一声二声叫んで降参して、下りて来て弾をありたけ分捕られたのが見えた。近所のおばさんが二人、昼めし休みで観戦中を通りかかった虎やん大将に、近来稀な田町坊主の戦争ごっここの戦況を聞いている。宮田での決戦場には生き残り勇士ばかり七・八人の少数で、愈々勝負となり周囲の畦は戦死者ばかりの凄惨な応援で勝負はなかなかつかないが、紅白軍の二人が途方もなく遠方に逃げのびて連絡とれず、仕方なく虎やんおん大も見切をつけここで声張りあげ力一ぱい、この勝負目出度く引分けと叫んだワンマン大将の得意思うべしである。さしもの野戦に軍団を投入した田町平野の大会戦は、本物の姫路聯隊大演習よりお先きに終結したのである。又、伊太やんの吹く調子外れでも、のびのびとした休戦ラッパが晩秋の入日輝く宮田の上に鳴り響いた。

昭和五十二年度

指定の史跡に就いて

(史跡部より)

昭和五十二年度には去る四月、次の三ヶ所が新しく史跡に指定されて、それぞれ高さ一メートルの石の標識が建てられました。標識には何れもその由来などが書いてありますし、先の会報でも一応ご報告しましたが、何分にもそれは極めて簡単すぎるから、もう少し詳細にとの希望がありますので、若干つけ加えてご報告致します。

(一) 史跡 船元の渡し場跡 (船元庵寺前)

鳥取から若桜を経て戸倉峠から南下し、山崎から林田經由姫路へは、勿論今の国道二十九号線であるが、それは明治以後のこと。旧藩時代には因幡街道として、頼山の有名な詩「姫路懐古」に「五疊の城楼、挿^み暁^を」に起り「北走^{りて}二因州^に路^に作^し又^を」と結んでいる。姫路市青山を東西に走る旧山陽街道との分岐点に大きな石の道標がバスの窓から見られる。

山崎はその因幡街道全線一二〇キロの最大の要衝であることは「播磨雑物語」(三巻、司馬遼太郎著)にも見える。山崎城は小藩ながら三重にも濠をめぐらしたものであるが、その城下防衛の第一線として、自然の要害である揖保川には特に橋を架けず、一朝有事の際に備えた。



純喫茶

インザール

山崎町山田
TEL②〇九〇九

渡しを東へ上ると、まっすぐに須賀の旧国道が続いている。この船元の渡し場付近に、次の三つのものがある。

A 俳聖 芭蕉の句碑

庵寺一雲寺の前旧街道の西側に、高さ一メートル余りの大きな川石の碑が、北面して建っている。

此道や行く人なしに秋のくれ

芭蕉翁吟 二頃庵年足謹書

すばらしい達筆である。芭蕉がここへ来たという記録は知らないが、この辺の風景がびったりとゆうところか。俳句の盛んな山崎では、芭蕉を大へん崇拜していたのであろう。南面には、安政二年星次乙卯四月十二日、小森年足、俗称仁右エ門氏によって建てられたもので、彫刻は広屋作太郎とある。安政二年は西暦一八五六年であるから、今から一二年昔のことである。年足はこの句碑建立に小判七枚を使った由で、その後四年、万延元年十月二月七日、四十五才で他界した。句碑に力を尽くすだけ

に当人も大へん俳句をよくしたことは、この碑の東面に
澄きったばかりでもなし秋の水

年足吟

克彦老人書 とある。

克彦老人とは、今の本町安井書店の先祖で、当時は酒
造業で、安井家六代に当り、長男七代克文とともに町内
に於ける仲々の歌人であったが、これ亦すばらしい書家
であったことがわかる。元治元年七十才没。尚現代の安
井書店社長克典氏は十代目だそうであるから、克彦老人
は祖父の祖父ということになる。

又、この句碑の大きな川石は、川戸の新淵の川原にあ
ったのを、船元の人達が筏を組んで運んだとのことであ

る。重機のない百二十
年の昔、人間の力でな
しとげた古人の力にた
だただ敬服する。

B 一石一字塔

やはりここ船元の共
同墓地にある。大きな
自然石で、
東面に 漸写一石一字
大乘妙典並三部経
北面に 無価白圭

西面に 渡海船筏 登天棧梯（四字宛二行に）

南面に 自然宝塔 透徹雲泥（四字宛二行に）台石の下
に大乘経と三部経の一字一字を川石一箇一箇に筆写して
積みあげたものである。大乘経とは華嚴経・大集経・般
若経・法華経・涅槃経の五つのお経をいい、三部経とは
無量寿経・観無量寿経・阿弥陀経の三つを言うことはよ
く知られているが、字数にして何千何万という数である
うか。紙に書く、いわゆる写経でも仲々大変であるのに、
川石を拾ってくることに、それに一字一字書いて積みあげ
た古人の偉大な信仰心に只只驚くのみである。随分の努
力精進を要したことは、北面・西面・南面の文字にあら
われているように思われる。

C 下座場

徳川時代には、大名の行列にあうと、一般庶民は道端
にひざまずいて、両手をつき、額を下の土にすりつける
様にして、その通行をおがんでいたという。そうするこ
とが土下座であるが、船元の渡し場から北方約百メー
トル、旧街道の西側に一段低い処が、南北に長く続いてい
る。ここが下座場といわれている処で、くわしくは土下
座場という意味である。

藩主が参勤交代の時など、領民の代表がこの下座場に
ならんで土下座し、おとの様の行列を送迎申し上げた処



であるという。特定の下座場が今日残っている処は珍しいことであろう。

(二) 史跡 山崎城内堀跡 (町立図書館上り口右側)

山崎藩は小藩であったが、初の池田侯が三万石から一時六万八千石と言う、播州で姫路・明石・竜野とならぶ四大藩の一であった時代に、城郭としての形態が整ったようである。

まず本丸は東西が約九〇メートル、又南北約八〇メートルの方形で周囲より一段と高く、四隅に角櫓を構え、それを結んで周りを城壁で囲み、外に内堀をめぐらし、二の丸は中堀をめぐらし、武家屋敷の外には外堀をめぐらした、実に堂々たる構であった。

内堀は、本丸の周囲の城壁のすぐ外側に、巾十間(約十八メートル)ほどの葉研堀と言う型であった。

東側は山崎小学校旧校門及び両側の白壁の外側すぐ下にあり、昭和十年代の初期に埋め立てられた。今日はよく自動車が駐車してある。又

北側は東側からつづき、今日のさつきセンター及び駐車場の処で、図書館への上り道は勿論なく、戦前は山崎小学校の報徳花園という立派な花壇があり、担当の松本吉次先生を中心に、職員児童の努力によって四季折々の美しい花が咲き乱れたが、戦時中には薩摩芋畑となり、食糧が豊富になってからは、今日の

様に変った。

西側は北側からつづき、今日は山崎中学校校地の東部である。

南側にも一部堀もあったが、現在の様に崖下を東から西へ用水路としての川が流れている。

(三) 史跡 山崎城埋御門の跡 (山崎小学校プールの南西)

山崎城の本丸の四隅には角櫓があり、その中特にここ西南の角櫓は、本丸から西側下の二の丸にある藩主の邸への通路として、階段で上下するようになっていた。高台になった本丸からみれば、角櫓の下の方へ埋めた形になっているところから、埋め御門と言われたものである。高低の落差のある地形ではよく見られる築城の一技法ではあるが、数万石の大名ならともかく、僅々一万石の大名には、これ亦過分の門であったことは、

山崎に過ぎたる

ものが二つある
埋め御門に荻田の娘
という里謡が生れたことでもわかる。



荻田の娘とは、用人荻田氏に二人の娘があつて、二人とも絶世の美人であつたが、佳人薄命のことばにもれず二人とも肺を病み早世した。その美しさが山崎の様ないなか町には勿体ないという処から生れたものである。今掛保郡新宮町宮内にある荻田家はその後嗣であるとか。

本年度は以上三ヶ所に、史跡標識を建てました。来年度の分は、係の方で目下検討中であります。会員の皆様からも、色々のご意見やご希望をお寄せ下さいましたら幸甚であります。
(以上)

明治以来百年の年譜(其の二)

堀 口 春 夫

明治三十一年 前野善次郎氏、山崎町長となる。山崎町開始三〇〇年祭施行す(元和元年池田輝澄の城下町開始より数えて三〇〇年)町は祝賀行事に賑わう。町長前野善次郎氏いろは、教え歌を毎年山崎小学校児童並に一般に配布す。同年七月、最上山に石の玉垣出来る。

明治三十二年 郡に常設蚕業巡回教師を設置、改良飼育

明治三十三年 町の有志によつて山崎町門前に製糸会社を設立す。北魚町恵美須さんに石の玉垣出来る。同年最上山下に郡公会堂落成す(元鹿沢中門下の道場の古材を使用)篠陽尋常小学校を山崎尋常小学校と改称。

明治三十四年 生田省三氏山崎町長となる。郡内に農事巡回教師招聘す。十二月旧藩主本多忠明侯山崎にて逝去さる。郡有造林設置さる。神原清太郎氏郡長となる。郡内造林計画活発となる。

明治三十六年 妹尾新太郎氏山崎町長となる。山崎尋常小学校に修業年限四年の高等科を併置、山崎尋常高等小学校と改称す。
明治三十七年 日露戦争始まる。予備後備の在郷軍人に召集令下る。

鮮魚料理(化)

中村鮮魚店

山崎町中央通商店街
電話一丁二四六八代



- 明治三十八年 山崎町より出征海軍大将及第十師団長へ慰問贈呈す。同年八月町内各部落に青年団を組織す。
- 明治三十九年 門前の製糸会社安志へ移転す。山崎町日露戦争戦時記念誌の編さん。
- 明治四十年 山崎町立技芸専修女学校設立す。旧藩主子爵本多貞吉氏東京にて逝去、本家三男本多涉氏山崎本多家を相続す。
- 明治四十一年 三月山下勢太郎氏、山崎町長となる。掛保川舟路改修意見書提出す。十二月電話交換事務を開始す。
- 明治四十二年 郡は製糸会社、安志へ移転した山崎製糸会社を買収し宍粟分工場を経営す。山崎町公会堂に於て郡連合青年団結成さる。那波徳治氏郡長となる。
- 明治四十四年 在郷軍人山崎分会創立す。
- 明治四十五年 山崎町に初めて電燈がつく。山崎小学校講堂新築成る。宍粟郡木炭同業組合設置す。
- 大正二年 四月山崎技芸専修女学校を廃して実科女学校と改称す。山崎友施会創立す。最上山に石燈籠、手水鉢出来る。
- 大正三年 桜島大噴火で当地方にも灰が降る。第一
- 大正四年 次世界大戦起る。七月宮宗眷三氏郡長となる。隔離病舎移転改築す。山崎新聞第一号発行さる。十一月御大典祝賀行事に全町民賑う。小学生旗行列、灯燈行列、流し手踊等、辻にわか行う。
- 大正五年 町役場本町に新築落成す。
- 大正六年 今田栄次氏郡長となる。七月前野善次郎氏再び町長となる。地理学者志賀重昂氏旧藩主本多涉氏学習院生徒を供い來崎す、小学生手旗で迎える。
- 大正七年 日本メソジスト教会聖旨幼稚園鹿沢菅江氏宅に出来る。七月前野忠雄氏山崎町長となる。第一次大戦休戦条約成立し祝賀旗行列。
- 大正八年 四月文部大臣認可を得、実科女学校を郡立実業学校と改称し新に男子部を設置す。郡は製糸工場拡張さる。第一次大戦後の好景気に恵まれ山崎の花柳界大いに賑わう。山師、馬喰等の散財で地獄谷宿場町的に繁盛す。山崎検芸者六十人を越す。
- 大正九年 乗合自動車山陽総道神社前に出来姫路へ山崎往來す。六月山崎町家庭会創立す。

大正十年

山崎町立幼稚園小学校内に出来る。キリスト教会並に聖旨幼稚園中門下に新築移転す。姫路自動車山田町に出来夜間も姫路山崎往来す。続いて竜山自動車出来、竜野山崎往来の馬車姿を消す。

大正十一年

四月町立幼稚園門前八幡下に新築成る。山崎女子青年団創立す。十一月郡制廃止と共に山崎実業学校を県に移管し、県立山崎高等女学校と改称す。校舎新築さる。当時郡内人力車の数一二七台、自転車漸次増える。

大正十二年

山崎警察庁舎新築成る。宍粟郡誌編集発行さる。最上山に鐘突堂建つ時の鐘初まる。

大正十三年

福原謙七翁の石碑建つ。新富座出来る。此年六月一日より八月二十四日迄降雨無く大旱魃なり。九月朝日座焼ける。芝居観劇中失火、十一月焼跡に木下曲馬団猛獣をつれて来りサーカスのジント町に流れる。中鹿沢に木工伝習所出来る。

大正十四年

枯れすすきの唄鳥打帽流行す。朝日座再建さる、こけら落しに中村福助来る。

大正十五年

相変らず花柳界繁盛し艶歌師・法界屋紅

燈の巷を往行す。夏は十二ン波に屋方船を浮べ粘狩盛、紺屋町美喜久座つぶれる。十二月大正天皇崩御さる。(町民八幡さんで御百度を踏む)

役員会情報

前期会報がたいへん遅れまして申訳ありません。会費の値上問題や、千本屋遺跡調査報告の原稿が遅れて居りましたので印刷が遅れました。会費の値上問題については去る八月上旬役員会を開いて討論致しました。郷土研究会は他地方の見学旅行をやるばかりで吾が郷土にこれと言う業績を残していない。これでは単なる旅行会に過ぎないと言う風評があつて、せめて郷土の史跡に標識でも立てて史跡を探究する人の案内に役立てようと言う事になつて昨年より石柱を立て初めたのですが、物価高の折柄一年に三本ぐらいしか出来ません。なお又現在の会費では会報代にも満たせないと言う有様でこれと言う事業は出来ない。そこで会費の値上問題が起きたのであるが、少々の値上では事業らしい業績は残せないし、郷土研究会の業績と言へばやはり未来への遺産として史蹟の保存復元がもっともふさわしい。そこでこれ等の事業を

行うためには資金の備蓄をせねばならないので、一般会費とは別に賛助会員を募り、特別の会費年千円を徴収し、別会計で基本金の貯蓄をする様論議が方向づけられました。しかし、結論は来年一月の総会にかけて決定すると言う事になりました。又別に史蹟保存会と言う団体を結成して、活発に活動してはと言う言論も出たが、結局郷土研究会の史跡部を生かして活動すると言う事になった。なお、又外に無形文化財として郷土に伝わるユニークな芸能を絶える事なく子孫に伝承して行く運動も大切と言う事で、郷土の青年団諸君にも参加活動してもらおう様働きかける事になった。例えば郷土色豊かな獅子舞や盆踊等々。